

夕雲閑眼

信志 大介

(一)

上野国黒髪神社で一休みした一行は、目前に迫った目的地の伊香保温泉への山道を急いでいた。従者の一人である片岡伊兵衛が腹痛を起こし、予定より一刻近くも遅れてしまったからである。

右手には浅間の山の山頂が口を尖らせたような稜線をくつきりと夕空に浮かび上がらせ、時を止めたかのような噴煙をゆつくりと立ち昇らせていた。

馬上の五郎右衛門にとって、保養を目的とした特別急ぐ旅ではなかったが、暗くなるまでに宿に着きたいと焦る従者たちの気持ちは充分に承知していた。だが、いかに鍛え抜いた鋼の身体とはいえ、三日前に江戸を出立して騎馬の旅に倦み、疲れていたことは確かである。

睡魔に襲われ、ふっと目を閉じかけたとき、はつきりと矢弦の音を聞いた。反射的に馬のたてがみに顔を埋めると同時に、耳元を矢が空気を切り裂く音を残して飛んでいった。

五郎右衛門の次の動作は、そのまま一気に駆け抜けるか、馬から跳び下り、左手の松林の中に転げ込むしかない。それは瞬時の判断であったが、恐るべきことに、次の瞬間には第二矢がすでに飛来してきて馬の右目を射抜いた。馬は弾かれたように棒立ちとなり、馬上の主人を振り落としてしまったのである。

五郎右衛門は後方に大きく弧を描き、左肩先からドウと大地に叩きつけられた。もんどり打つ地響きと共に、枯木が弾けるような鈍い音を聞き、左手が腋下にめり込むような激しい圧迫感を感じて失神しかけたが、兵法者の肉体は自動的に反応して、落下してきた乗馬の下敷きになることはようやくにして免れ得た。

断末魔の痙攣を繰り返す馬の背に寄り添うようにして横たわりながらも、五郎右衛門は、すばやく目を巡らせて状況の把握を図る。

矢で首筋を射抜かれた門弟の一人が即死しているのが見える。馬の口取りをしていた従者は、弾き飛ばされて草むらの中で失神している様子である。付き添っていた門弟の二人の内の一人である片岡伊兵衛が、抜刀して折り敷き、弓矢の飛来に備えている。

急速に威力を増した西日を受けた浅間の山頂が、サツと淡い桃色に染まるのが見えた。それが合図でもあったかのように、右手の雑草に覆われた岩陰から、袴の股立を取った三人の武士が白刃を夕光にきらめかせて、わらわらと駆け出てきた。

折り敷いて抜き身を霞に構え、正確な矢の飛来に備えていた伊兵衛は、湧いて出た男たちの姿を見るや、猿の鳴き声に似た奇声を発して疾走を開始し、たちまち武士たちの間を駆け抜けると、いつの間にか刀は左手に持ち替えられており、右手が小さく弧を描いたかかと見るうち、大岩の背後に聳え立つ楠の頭上から、半弓を握り締めた若い武士が真つ逆さまに落ちるのが見えた。

三人の武士はそのことに構うことなく、まだ倒れたままで見ている五郎右衛門の元に殺到してくる。五郎右衛門は横たわったまま左脚を引き付けて、即座に立ち上がれる態勢を整えて、襲来を待つ。

真つ先に駆けてきた一人が、いまや四肢を横たえて動かなくなった馬腹を飛び越えて刀を垂直に突き立ててきた。身を起こしざま片手抜き打ちに斬り上げた五郎右衛門の豪刀が、袴越しに敵の高腿を深々と切り裂いた。血飛沫が青白い死馬の横腹をサツと染めた。

続く二人目は、余りにも鮮やかな手並みに、ぴたりと走行を止めたが、血刀を引つ提げて死馬の陰からゆらり立ち上がった目指す相手に向かい、眼を吊り上げて刀を八相に構え直す。

五郎右衛門は、左手が肩の付け根からまったく感覚が無くなっているのに気付いていたが、気は限りなく澄み渡っていた。不思議な気持ちというべきであるが、刀を構えて目の前に迫ってくる名も知らぬ一人の侍に、斬られてもいいとさえ思っていた。物取り野伏りの類でもなさそうであり、度重なる経験から、どうせ、どこかで真剣勝負をして斃した道場主か剣術師範の門弟の類であろうことは分かっていたのである。三人目は、二人の背後に廻った伊兵衛と向き合っている。

六尺豊かな上背と三人力とうたわれた大力を持ち、師の源信斎も兜を脱いだ卓抜した剣の業を振るって、力任せに勝負の相手を斬り殺してきたこれまでの生涯に、鋭い夕日に似た悔悟の影がふっと差しかけてきたのである。左手は相変わらず泥のように無感覚であったが、直前に一人の若い武士を即死させた右手の剣も殺気を失い、だらりと持ち下げられたままである。

相手の武士もただ者ではなく、五郎右衛門の気が抜けた瞬間を見逃す筈もなく、間髪を入れず鋭い気合と共に真つ向から打ち込んできた。ピョウと大気を切り裂く刃音を確かに聞いた気がした。生暖かい血飛沫が五郎右衛門の顔面に振りかかり、彼は気を失ってゆつくりとその場に倒れた。

(二)

五郎右衛門は激しい痛みを感じ、苦悶の呻き声を漏らしてふと我に返った。薄目を開けると、雨漏りで染みのできた天井板がくつきりと見え、まなじりに二人の男が自分の顔を覗き込んでいる風情が分かった。

「先生、ご無事で何より……」

涙に詰まった片岡伊兵衛の野太く張りのある声が響いた。

もう一人は、馬が棹立ちになったときに撥ね飛ばされて失神した轡取りの平助である。畳に頭を擦りつけたままひたすらにうずくまっている。

激痛の原因は、落馬したときに挫いた左腕であることは今にして分かる。そのときは、極度の緊張の余り、ただ痺れているだけであつたが、今は、大声で叫びたいほどの疼痛をもたらしている。

気配を感じて左脇に視線を移すと、くわい頭の薬師が治療を終えて立ち上がろうとしていた。患者の射るような視線を感じて薬師は、曖昧に笑顔を作り、すぐに背を向けた。相当の重症であることが相手の挙動で分かる。

視線を宙に移し変えた五郎右衛門に向つて、伊兵衛がほざいた。

「お見事でござりました。右手に振り上げた先生のご無心の一刀は、敵の顔面を真っ二つに斬り割り、即死させまして御座ります。

あわやと肝を潰しましたが、先生のお刀は一直線に伸び、相手の顔面に吸い込まれていったさまがしかとうかがわれました。

先生、お身体は無事で御座ります。ご安心なされてこの伊香保でしばらくご養生下さい。ここの湯はとくに怪我の効能に顕著とのこと。とりあえず、薬師が見立てました痛み止めのお薬をどうぞ」

伊兵衛は五郎右衛門の上半身をそっと抱き起こし、どろりとした茶色い液体が入った茶碗を差し出した。五郎右衛門は自由が利く右手で茶碗を受け取り、苦味に顔を顰めながら液体を一気に飲み干した。

再び横になった五郎右衛門は、眼をつぶり少しく呼吸を整えた後、

「喜左衛門は死んだのか……」

と、独り言のように呟いた。

最初に矢を受けて倒れた軍司喜左衛門は、まだ若いが抜群に腕の立つ愛弟子で、五郎右衛門が特に名指して供の一人に選んだ逸材であつたのである。

「はっ、真に無念ながら果てまいてござります」

伊兵衛は、喜左衛門を死なせたのは自分の責任でもあるかのように、苦渋の表情を浮かべ、深く頭を垂れた。戦鬪で乱れたままの鬢のほつれ毛がはらりと頬に垂れ掛かった。

五郎右衛門は眼をつぶったままかすかに頷いた。

「それではこれにて失礼いたします。先程申し上げたとおりのことを守って下されば、大事に至ることはないと存ぜられます」

初老の薬師は、風呂敷包みの薬箱を抱えて静かに退出して行つた。轡持ちの中間平助が見送りのために慌ててその後を追う。

山の温泉地にすでに深い夜気が立ち込め、薬師の退場と入れ替わるようにして、温泉特有の硫黄の匂いがゆるりと部屋に侵入してくる。

みるみる痛みが引いてゆくのを五郎右衛門は感じていた。薬には眠りを誘う成分が含まれているらしく、現実感を失わせるような遠い眠気が臉を強く抑えてくる。

閉じられた臉の内側に、顔面を断ち割られる一瞬前の若い武士の顔が、ふつと斜めに立ち上がる。その瞬間五郎右衛門の心にズキンと激しい痛みが走った。もとより、あたら前途ある若い武士の命を断ったということに対する悔悟の気持ちには毛頭ない。相手は、自分の命を狙った敵であり、殺すか殺されるかの戦闘であるから、自分を守るための止むを得ない本能の反応にしかすぎない。相手に同情したり憐れむ気持ちが少しでもあれば、これまでの五十度に及ぶ真剣勝負でことごとく勝ちを収めるということはありえなかったであろう。つまり、とつくの昔に命を落としていたであろう。

彼の心の痛みは別のところにあった。痛めた左腕である。伊兵衛がどのような取り繕いの言葉を述べようとも、痛めた左腕は重傷であり、使いものにならなくなったという確信があった。そのことは兵法者としての終焉を意味する。

師の小笠原源信斎から新陰流の免許皆伝を受け、自分の道場を持つてから数年を経た今、術技にも円熟味を増し、時の將軍家光から、御前での技の披露を求められていたほどであったのである。もともと、將軍の急逝によって、御前での晴れある術技披露は沙汰止みとなってしまうたのであるが。

門弟も三千人に達せんとし、兵法者として絶頂期にあるその時に、不具となった現実を認めざるを得ないということはいかにも辛い。五郎右衛門は心底から懊悩した。

止むを得ない勝負の場とはいえ、多くの武芸者を殺傷してきた呪いが、こうした形で現れてきたのかもしれないと、ふと思ひもしたのである。

これまで夢にすら見ることもなかった勝負の相手が、身動きならず仰臥する五郎右衛門の脳裏に走馬灯のように現われては消える。長く尾を引く苦悶の声を発して、傷付いた初老の兵法者は深い眠りに落ちていった。

(三)

五郎右衛門の傷は意外に重く、結局は、思いの外早く訪れた山里の初雪を見る時期まで、自由に起居するまでに回復することはなかった。幸いに、温泉地での養生という形となり、十分な手当てが適わなかったにもかかわらず、腕を落とすといった最悪の事態だけは避けることができた。

激痛が取れる間の半月間ほど、びったり付き添って離れなかった高弟の片岡伊兵衛には、江戸への帰国を命じ、師範代として道場の運営維持を行うよう指

示してある。その点で、数千人もの弟子を抱える大道場への運営に心残りは少しもなく、また、妻子のいない独り身の気安さで、異国へ逗留することの不安はあるはずもなかったが、五郎右衛門は兵法者として、かつてなく悩み、氣心を掻き乱す日々が続いた。

湯壺に白い湯氣が立ち、削り取られた岩肌に密生する岩苔から滴り落ちる湯氣が、ひやりと肩を撫でる。

傷付いた左腕をかばうようにして湯に身を沈める新陰流の覺者にとって、両手で刀を握ることができなくなった不具の身は、もはや兵法者としての存在価値はなく、引退するしかない状況にあった。

一兵法者として、功成り名を遂げた五郎右衛門であつたが、不覺を取つての怪我によつて引退を余儀なくされるといふ事態は、不名誉以外の何物でもなく、例え傷が癒えてもおめおめと江戸へ帰れる状況ではない。師の源信斎から天才と謳われ、数多くの真剣勝負にことごとく勝ちを収めてきた経歴からしても、不意を襲われたとはいえ、落馬して腕を駄目にしたというのは、兵法上の未熟としか言いようはない。

五郎右衛門はそのことのみをひたすらに恥じた。ある朝など、懊悩が昂じた余り、上がらないはずの左腕を無理矢理持ち上げようとし、激痛のためにバランスを失い、薄く雪化粧をした前庭に転げ落ちたほどである。

雪まみれになって庭に転がったまま、五郎右衛門は、土混じりの雪を噛みながら、悔しさの余りはらりと不覺の涙を落とした。

兵法者として、また、一個の武士として、生き恥を永らえるよりはこの場から行方を絶ち、ひそかに自裁して果てるのが自分の取るべき道のように思えたのである。異変を察して駆け付けてきた中間の平助が、庭に飛び降りざま、

「ご主人さま、いかがなされましたか！」

と助け起こそうとしたのであるが、五郎右衛門は自由に使える右手を激しく振り、平助を一問余りもすつ飛ばしてしまった。

「平助、脇差を持ってこい！」

血走った眼をし、激高した口調で命じる主人のただならぬ氣配に、平助は一瞬戸惑う氣配をみせた。

だが次の瞬間には、直ちに身を起こして脱兎のごとく濡れ縁に駆け上がり、座敷に飛び込むや否や、脇差ではなく大剣を引っ掴んで取って返し、縁から飛び降りざま鞘を抜き放って、地べたに転がる主人の五郎右衛門に向つて突き立ててきたのである。

五郎右衛門は間一髪のところ、身を半回転させて鋭い切っ先をかわした。

「無礼者、何をするかっ！」

そう吼えざまに五郎右衛門は、地面に突き刺さったままの剣を右手で抜き取

り、影と化してうずくまる平助を討ち果たそうとした。

だが、すでに観念して雪塗れの地べたに平伏したまま、主人の刀が振り下ろされるのを待つ平助の姿に、微塵の迷いもなく恐れもなかった。

五郎右衛門は刀を振り上げたままひとと自らの下男を見据えた後、ゆっくりと刃を降ろし、かたわらに転がる鞘を拾って抜き身を納めつつ、詫びた。天下の兵法者が涙を流して心から詫びた。

「平助、よくぞ……」

五郎右衛門は、胸が詰まって後の言葉を継ぐことができなかった。平助は平伏したまま肩をわななかせている。

五郎右衛門は、中間の平助が、主人に討ち果たされるのを覚悟で取った行為の意味を、瞬時に悟ったのである。

左手が使えなくなったことに、兵法者として懊悩するあまり、右手が自由に使えるのだということに思い至らなかったのである。思い至ったてみれば至極単純なことなのであるが、ある単純な事実に対して、そのことを認識するのと気付かないままでいるのでは、天と地ほどの差がある。

平助のとっさの行為によって、片手しか使えなくても兵法に差し障りはないこと、むしろ、片手であるからこそ、刀法に力みがなくなり、無心の境地を得ることができるということを知った。

五郎右衛門は、この地に向う山道で突如襲われ、落馬して左の二の腕と鎖骨を骨折する重傷を負い、そこを得たりとばかり拌み打ちに斬りかかってきた相手を、右手に振り上げた無心の一刀で斃した事実を思い起こしていた。

そこに鍵がある。それまであれほど思い悩み、中間の平助にまで死を覚悟させた迷いが、ようやくにして解けた気がしたのである。

(四)

山里の温泉地に本格的な冬が訪れてきた。宿の庭には連日降る雪が積もり、目の辺りにする風景を白一色に変えている。丘陵地の中程に位置するその宿からは、なだらかな起伏に沿って宿の草葺屋根がぼつりぼつりと見え、それらの屋根の周囲から白い湯気を立ち昇らせている。

中間の平助にとってまた一つの悩みの種が増えた。というのも、まだ暗い内に起き出してきた主人の五郎右衛門が、雪が降りかかる濡れ縁に結跏趺坐して瞑想三昧に耽るようになったからである。

あのことがあって以来、主人の苦しげな立ち居振る舞いはふつと掻き消え、喜色満面に満ちた穏やかな日常に変わり、奉公人として命冥利に尽きると一安心したのも束の間、今度は、早朝から深夜に至るまで、凍てつく寒さにもかかわらず、外気に身を曝しながら座禅を組むようになったのである。

もともと主人であり剣術の師でもある五郎右衛門は、かねてより江戸駒込の竜光寺住職の虚伯和尚に就いて禅を学んでいたという経緯がある。師への傾倒は並々ならぬものがあり、学問とは無縁の環境で剣一筋に生きてきた師にしてみれば、虚伯和尚との出会いは、晴天の霹靂のごとくであったことは十分に頷くことができる。

したがって、座禅を組むという行為に対しては、何ら違和感はないのであるが、度を過ぎたその行為に対して平助は脅えた。

ただ一人付き添いの従者として居残った平助は、主人の健康に気を付ける義務があり、無事傷が平癒した暁には、今度こそ何事もなく江戸へ運び入れる使命を担っている。雪中の座禅で、身体を損なうようなことにでもなれば、それは自分の責任である、と平助は考える。

平助は、外がどんなに暗くてもまた寒くても、主人が起き出す前にすでに起きていて、陰ながら、結跏趺坐する主人の姿を見守りつつ、朝食の用意を、また夕食の準備をするのである。

むろん何度か座禅三昧に耽る主人五郎右衛門に対して、意見めいたことを言いもした。そうか、と肯い、言うことを聞いてくれる主人ではないことを熟知しているつもりでも、つい愚痴を言ってしまう。

そういう平助の心からの主人を思う言葉に対して、五郎右衛門は、笑って答える。

「平助よ、気を使ってくれることはうれしいが、わしはお前によって一度甦った男だ。これぐらいのことで死にはせん。案ずるに及ばず」

平助も、師の五郎右衛門が確かに甦りを果たし、精気を全身にみなぎらせていることを認めないわけにはいかない。

ただ、急激に気温が下がった朝など、萎えた左腕がことさらに痛むらしく、苦痛に顔を歪め、失心寸前の状態で座り続けている姿を見るにつけ、なぜそれほどまでして、とつい思ってしまうのである。

それでも、時に全身に降りかかる雪を払うでもなく、路傍の地藏仏のように身じろき一つせず座り続ける、白髪交じりの主人の後姿を見てみると、目頭が潤んでくるのを避けることができない。

主人はすでに、自分の意思の及ばない別の場所にいることだけはひしとして分かる。

平助は、主人五郎右衛門と同じ上野国針力谷出身である。針力谷一帯はもともと甲斐武田方の落人が棲み付いた邑で、五郎右衛門の何代か先もその例外ではなかったが、姓を憚って邑の名とし、帰農して百姓となったのである。

平助は、代々針力谷の地百姓であったが、五郎右衛門の実家と付き合いがあ

り、その次男坊が兵法家として大成し、江戸で立派な道場を構えたと聞き、十六歳になったとき邑を出て小網町の針力谷道場を訪ね、下男として働くことになったのである。むろん、剣を習いたいという野心があつてのことで、妻のいない五郎右衛門の身の回りの世話一切の面倒をみるとともに、請うて剣術の手ほどきを受けてきたのである。

きわめて熱心なだけあつて、腕もぐんぐん上達し、門生を指導するほどまでになった。同郷のよしみということもあり、純朴で一途な性格が五郎右衛門にいたく気に入られ、どこへ出掛けるのにも、平助は欠かせない供となっている。

長年にわたつて五郎右衛門の身の回りの世話をしてきた平助としては、主人の行動の規範は熟知しており、供をしていて何度か遭遇した真剣勝負の場においても、その太刀先を冷静に読めるほど主人を知り尽くしていた。

そう思っていた。しかし、この度だけは主の心域が何としても読めず、その人が境地を飛躍的に延ばし、平助の理解と想像力の及ばない、はるかな遠くに行つてしまったことだけは、おぼろに感じられた。

(五)

五郎右衛門の惑乱はすでにふつ切れていた。六尺豊かな大男の彼にとつて、片手で大剣を振り回すことはいともたやすいことであり、なぜもっと早くそのことに気付かなかつたのかと悔やまれたほどである。

彼は師の小笠原源信斎に就いて新陰流を極めたのであるが、鹿島神宮を発祥とする鹿島神刀流、百年ほど前に念大和尚によつて創められた念流、また新興の一刀流についても学んだ経験があり、剣術のあらゆる型を熟知しているつもりである。その過程で、剣術流派に共通した弱点を意識するようになっていた。

ここで、主人公の剣術師匠小笠原源信斎に就いて少し説明しておきたい。彼は名を金右衛門長治といい、遠州高天神城の主であつた小笠原長忠の弟(一説に甥)であつた。若くして剣術に長じ、飛ぶ鳥を落す勢いであつた新陰流祖上泉伊勢守晩年の弟子となり、剣の業にさらに磨きを掛けた。だが天正年間高天神城は落城し、兄の城主長忠は切腹して一族は離散、長治は流浪の身と成り、西国に流れた後支那に渡つた。

異国の地で新陰流を教えているうち、武術の達人張良の末裔と称する人物に出会い、矛の術として教わつた八寸の延曲(のべがね)という業を剣術に応用し、自在に使いこなすに及んで帰朝。帰国後は、師の上泉が存命していたとしても負けは取らないといわれるほどの達人となつた。噂を聞きつけて続々と入門者が増え、門弟三千人と言われるほどの大道場主となり、真新陰流という一派を起こすまでになつたのである。

さて、弟子の五郎右衛門である。

彼が、各流派に共通して意識するようになった弱点であるが、その第一は、防ぎ業が多いということである。撃ちかかられるのを予想して横に跳んだり、飛び上がったたり、剣で受け流したりする業が型に多く取り入れられ、日々の稽古では欠かせないものとなっている。後の先を流儀の極意とする新陰流にもそうした型は多い。

しかし、度重なる生死を賭けた真剣勝負で得た結論は、防ぎ業はほとんど何の役にも立たないという認識である。刀を抜いた後の心理的駆引きは、たしかに勝敗に重要な要素となるが、ひとたび刃を交えるそのときには一瞬にして勝負が決まるのである。跳んだり撥ねたり受け流したりする余地は、まったくないというべきである。それほど相手の剣の動きは、速く、強く、鋭い。

その第二は、余りにも勝ち負けにこだわりすぎることである。真剣勝負の場では、負けるということは即死を意味しており、勝ち負けにこだわるのはむしろ当然のことであるが、こだわり過ぎると、心身の硬直を招き、遅れを取ることにつながる。剣者は、ひとたび勝負の場に立つことになったとき、まずは死を覚悟して相手と向き合う、というのが五郎右衛門のかねてよりの主張であった。

すなわち、勝負に勝たなくても相打ちに終われば士道は守れる、という思いが強かった。

かつて、五郎右衛門が独立して道場を張るようになる少し前、師源信斎の私宅を用あって訪ない、書院に通されて歓談するうち、かねてより抱いていたそうした疑問なり覚悟なりを師に告げたのであった。

穏やかな表情で茶を喫っていた源信斎は、手に持っていた湯呑茶碗を静かに下に置いたと見る間に、振り向きざま背後の刀架けから二尺六寸長光を掴み取り、鞘のままチョウと五郎右衛門に打ち掛かっていた。むろん、五郎右衛門はとつさに初太刀は避けたが、態勢を崩したその場に、間髪を入れず突き出されてきた鞘の鎧を脇腹に受け、危うく息の根が止まりそうになった。

とつさの急襲に対処する間もなく、一瞬息の止まった五郎右衛門は、師を睨み据えて脇差に手をかけさえたが、すぐに師の意のあることを悟り、痛む脇腹をかばうようにしてその場に平伏したのであった。師は、自らの佩刀を五郎右衛門の前に投げ出すようにして置き、銀色の総髪を揺らしながら、無言でその場から退出して行った。

その刀でいつでも打ち掛かってこい、という師の声なき声を聴いた気がしたが、畳に付いた遅しい両手は、敗北感と屈辱のためにわなわたと震え、もはや闘志を失っていたのである。

その体験は、後の五郎右衛門の生涯に大きな影響をもたらすことになる。業を伴わない不用意な言葉は身を滅ぼすだけであると知った五郎右衛門は、

魂の業を徹底して練るために、禅門を敲いたのである。参禅への発意はまた、心ならずして殺めることになった数多くの武芸者に対する弔意を含むものでもあったであろう。

様々な師に就いて打管跣座すること七、八年。ようやくにして虚伯和尚という偉大な師に巡り合い、参禅を重ねて今日に至っている。

生涯を剣の修業に捧げた剣士として、絶え間なく剣を振るっていたという誘惑に抗して、終日禅院で座り続けることは苦痛以外のなものでもなかったが、彼はその試練に耐えた。彼が血の匂いに狂ったように真剣勝負に挑んだのは、二十五、六才頃までであったが、幼少より身につけた非凡の業に加え、拔群の膂力、蛮勇ともいえる勇氣によって、いわば偶然の勝ちを収めてきたに過ぎない。

だが、虚伯和尚の指導を受けるようになってからの五郎右衛門は、以前とは別人のごとく、思慮深く心の練れた、ことに臨んでまったく物に動じない剣士としての評判を勝ち得た。と同時に、努めて相手の挑発に乗ることを避け、極力真剣での勝負を避けるようになったのは、けだし当然のことといえる。

著しい心技の成長が認められ、小笠原道場の師範代として推挙されて間もなく、独立して自らの道場を持つに至ったのである。

(六)

だが、かつての真剣勝負のツケともいうべき襲撃によって、左手を使えなくなったことが、これまでの数多くの試練の中で最大の試練でありかつ危機であることは明らかである。

全身全霊を込めた氣力の座禅によって、ようやく心魂の衰耗だけは脱したものの、剣士としてどう生きるかという解決の道は見えてはこない。

片手であっても十分に剣は使えるという微かな光明を見出しはしたが、それを刀法に繋げようとすると、途端に視界は闇で閉ざされてしまうのである。

本当は、刀法などどうでもよい、と思う気持ちに傾いている。すべてが心魂の問題にかかっていることは自明のことだからである。五郎右衛門は努めて無心であることを心懸け、ひたすらに座り続けた。

髭は伸び放題であり、頭髮も梳ることもなく、首の後ろで束ねているだけである。着たきりの小袖もよれよれとなり、全体の風貌は、山中に寝泊りしながら修業する放浪の武者修行者さながらであった。

厳冬の中ですわり続ける五郎右衛門は、ときに幻覚を見、寒さと苦痛で失神寸前となりながらも、放心のさなかで、突然襲ってくる喜悅のために全身がわななく歓喜を体験し、三昧の境地に遊んだ。

山里の厳しい冬がようやくにして峠を越し、春如月のある日、五郎右衛門は鶯が鳴く声を遠くで聴いた。いや、聴いた気がしたのである。

「平助、鶯の声じゃな」

「えっ、もうどこかで鳴いておりましたか」

脇に控えていた平助は力なく答える。

たった七、八日程度の予定でやって来た伊香保の湯に、主人の身に重大事があつたとはいえ、すでに四ヶ月の月日が経とうとしている。

昼夜を継ぐ傷の看病が一月余りも続いた上、心の葛藤に苦しむ主人の姿を見ていると、平助は、夜中になつても、今はどうなさっているだろうか、ちゃんと休んでおいでであろうか、と気になつてろくに眠れないのである。平助は、いつ倒れても不思議ではないほど憔悴しきつていた。

「ほれ、もう一度鳴いた」

主人にそう言われて耳を澄ますのだが、鶯の鳴く声は平助には聴こえない。主人の耳にだけその声は聴こえているのであらう、と平助は思う。

「間もなく江戸から使いが来る。その折は使いといっしょに平助も江戸に帰ってもらう」

今にも馬に乗った使い人が見えてくるような、確とした口調で五郎右衛門は脇の下男に告げた。

「滅相もないことです。いつにならうとも、わたしは先生のお供をして帰ります」

慌てて平助はそう言ったが、主人の心遣いが直に伝わる心地がしてうれしかった。

そつと伺い見る髭もじやの五郎右衛門の顔は、顎が尖つて痩せ細り、表情もいつもの厳しさを失っていないが、伊香保に辿り着いて以来見ることのなかった、穏やかさというか輝きというか、自信を取り戻した人の威厳のようなものが宿っているのを平助はみてとった。その表情に感応するかのうちに、平助の心の中に深い安堵の気持ちかなだれ込んできた。

主従の会話が終わるか終わらないうちに、宿の主人があたふたと来訪者の到来を告げにやってきた。心なしか、陽のあるうちに宿に着いた客人の到来にほつとしている気配がみえ、濡れ縁に面する障子を染める淡い桃色の夕光が、色白ででっぷり肥え太った宿の主人の顔に照り映え、日頃のふてぶてしさに似合わない含羞を添えているかにみえた。

漆黒の闇をもたらす夜の到来は間近かである。

「伊兵衛が来たのであらう。通せ」

五郎右衛門はそう言って脇息を横に倒し、肘掛の柔らかい部分に頭を乗せて

横たわり、目をつぶった。

平助は驚嘆の思いをにじませた眼で、江戸からの使者の到来をぴたりと言い当てた師の、深い陰影に彩られた横顔を見詰めていた。

なぜか、平助の目に涙が滲んできた。

「伊兵衛にござります。お師匠様にはご機嫌うるわしゅう存じ奉ります」

この数ヶ月の間に、頬から顎にかけて豪快な髯を蓄えた、針ヶ谷道場の門人筆頭片岡伊兵衛は、横たわった師に向って型どおりの挨拶をした。平伏する伊兵衛の身には、一瞬の隙も見出せない緊迫感がみなぎっている。

横たわって眼をつぶった師に、いつ腕の程を試される不意打ちを喰わないとも限らないからである。伊兵衛の後ろに、元服したばかりとおもわれる若侍が、緊張に身を震わせ、畳に頭をこすりつけて平伏している。

薄目を開けてかしまる伊兵衛をちらりと流し見た五郎右衛門は、脇息に頭をのつけて横たわったきわめてくつろいだ様子で、江戸の道場を預かる愛弟子と向かい合った。

「先生、痛められた腕のお具合はいかがでござりまするか？」

伊兵衛は心から心配そうに問いかける。

「按ずるにおよばず。湯治のかいあつて見事に癒えたわ」

師の言葉に力は漲っているが、それが事実でないことを伊兵衛は悟っていた。伊兵衛がこの伊香保を去る時点ですでに、薬師から元どおりになることが不可能であることを告げられていたのである。炯々と輝く眼光は別として、蓬髪に伸び放題の髭、くたびれ果てた帷子を見るにつけ、左の腕が使えなくなったことが、師にいかに長期間の懊悩をもたらしたか、一目瞭然であつたからである。

「左様でござりまするか。それは何よりのこと」

と、伊兵衛はあえて豪傑面をほころばせ、それ以上師の怪我についての言及を避け、傍らに控える若侍を紹介した。

「ここに連れ参りましたのは、我が藩の子小姓中村権内安成にございます。以後お見知り置き下さいますよう」

「な、中村権内安成でございます」

初めて剣術の手ほどきを受けた師の伊兵衛のさらなる師である大先生を前に、若侍は緊張しきっている。（この若侍こそは、はるか後に、千度の試合を行って一度も負けたことがないと謳われた天才剣士真里谷円四郎―無住心剣術第三代―を打ち破ったただ一人の男となるのである。）

伊兵衛はおもむろに懷に手をやり、

「虚伯和尚から預かって参りました」

と、油紙に包んだ書状を取り出して、師の前に差し出した。

「うむ」

そう小さくうなずいただけで、五郎右衛門は書状には手を触れようともせず、横たわって目をつぶったまま立て続けに問うた。

「道場はうまくいっているかの。目患いをしておった源左衛門殿はいかがいたしたか。右衛門佐様（筑前福岡藩当主黒田光之）はご達者でおられるか」

「はつ、皆つつがなく稽古に励んであります。源左衛門殿はよほど具合が良いとみえ、毎日道場へ詰めておられます。わが殿はますますお達者で、一日も早く先生の手ほどきを受ける日をお待ちにございます」

高田源左衛門は、五郎右衛門の道場で一等最初に新陰流の免許を受けた俊才であるが、眼病を患い、久しく病の床に伏していたのである。片岡伊兵衛が仕える筑前福岡藩の現当主黒田光之候は、五郎右衛門に誓詞を入れ、剣術の弟子となっている。

「それよりも先生、大先生がご引退を決意なされました」

伊兵衛は、そのことを告げたいためにここにやって来た、とても言いたげな逼迫した口調で一つの異変を師に告げた。大先生とは申すまでもなく、五郎右衛門の師である無敵の剣客小笠原源信斎のことである。

五郎右衛門は相変わらず目を閉じたまま「ふむ」と短く呟き、話の続きを促した。

「これは大先生のご門人から直にお聞きしたことでございますが、あるとき稽古が終わって、大先生を囲んで御弟子の方々と歓談中、このところ、二刀を遣って兵法評判の高い宮本武蔵の名が出ましたところ、神谷丈左衛門殿が、宮本とても鬼神ではない以上、彼を打ち込めぬ事がありますまい、と断言まされたそう——」

頬の豪傑髭を震わせながら片岡伊兵衛がそう述べたとき、五郎右衛門の閉じられた脛がぴくりと動いた。

その反応を確かめるようにして伊兵衛は話を継ぐ。

「すると大先生はいたく御立腹なされ、いや其の方ぐらいの腕で宮本の批評は僭越である、謹みなさい、と戒められたそうです。すると、神谷様は、某には成算があります、と答えられたので、大先生は、しからば自分が宮本の仕方をもって汝と立ち会って試してやろう、とおっしゃるなり支度をなされ、大小の木太刀を構えて、神谷様と相対されたのでございます」

伊兵衛はまるで自分がその場に居合わせたかのような語り口となり、気持ちが大んだん昂揚してきたのか、顔にうつすらと赤味が差してきた。

「大先生は、大小を下段に組み詰め寄る、神谷様は上段に構えて立ち向い、すぐさま松風を振るって下段に差しなおすところを、大先生踏み込んで二刀をもつて下段の木剣を挟み押さえにかかる刹那、それを撥ね返した一刀で、電光石

火、恐れ多くも大先生の額をはつしと打たれたのでございます」

伊兵衛はもうほとんど立ち上がり、両者の型を身振り手振りで演じている。扈從してきた中村権内は、傍らにいてはらはらしながら、針ヶ谷道場門人筆頭の伊兵衛の派手な演技を見守っている。

その状況を伝えようとする当の相手である師の五郎右衛門は、盲人のごく目をつぶり横たわったままである。伊兵衛にとってはもはや師匠が聴いていようがいまいがどうでもよいとばかり、情景の描写に夢中である。

「大先生は、参った、と言おっしゃり、大小の木太刀をからりと放り出して奥へ入って行かれました」

伊兵衛はやや沈黙した後、

「ややあつて出て来られた大先生は、手に巻物を一杯抱えられ、神谷様の前に積み上げられて拝礼し、流義の極意ならびに朱印墨印まで授け、門人も譲るむねおおせられ、神谷様が平伏して固辞するを構わずそのまま奥へ引き下がり、二度と出て来られなかったとのことで、大先生は…隠棲を…決意なされたのでございます」

そう述べて、当時海内無双と謳われた小笠原源信斎の隠棲の詳しい顛末を語り終えた。自らの話に感動したのか、あるいは、大先生の道統を受け継ぐのはこの人しかないと言われていた自らの師である五郎右衛門が、嫡伝の後継者となることを逸した悔しさによるものなのか、伊兵衛は目にうっすらと涙を浮かべ、膝に両手を置いて頭を垂れた。

さてここでまた筆者がしやしやり出てくる。伊兵衛が述べた話しは創作ではなく、直心陰流の伝書『切紙究理秘解弁』に記してある。この話で注目したのは、当時敵なしと謳われた源信斎が宮本武蔵を高く評価していることである。源信斎の晩年の状況から押して、武蔵は船島の決闘で佐々木小次郎を破って間もなくの頃であり、天下にその名が聞こえていたことを傍証するものである。

武蔵は、己より強よそうな人とは立ち会わず、名もない弱い武者としか勝負しなかったので、『五輪書』に自ら記すとおり六十余度の勝負ことごとくに勝つことが出来たのだ、とまことしやかに語られる向きがあるが、当時海内無双の第一人者から一目置かれていたということは、武蔵の名誉のために特筆しておかねばならないと思う。

武蔵は一介の素浪人であったので、地位や権勢のある名だたる剣家と立ち会うことが不可能であったのではないか。一方で、名の知れ渡った剣客たちは、武蔵の恐るべき腕に畏怖しつつ、彼との対決を忌避してきたようにも思われるのである。

また、伊兵衛の話の中で師の源信斎を打ち負かした神谷丈左衛門というのは、

直心流という流派を起こした神谷伝心斎のことであり、この道統は山田平左衛門光徳に受け継がれ、幕末に男谷誠一郎や榊原健吉を生んだ直心陰流の起源となり脈々として現在に伝えられている。

(七)

外はすでに夜の帳が降りようとしており、まだわずかに残る明るみが、居室の障子に影を落としていた。伊兵衛が語り終えるのを待つて平助が、石を打って高燈台に火を灯す。

伊兵衛の講釈調の長物語をほとんど無言で聴いていた五郎右衛門は、そこで初めて目が覚めたかのごとく、ゆつくりと起き上がって居住まいを正し、重大な情報をもたらした伊兵衛の熱弁に一言の感想を漏らすこともなく、先程渡されていた虚伯和尚からの文を手元に引き寄せ、油紙を解き、書面に目を落とした。

伊兵衛と権内は、ひたと師匠の挙動を見詰める。そう長い文ではない。というより、何やらちよいちよいと数行書かれていただけのようである。

だが、五郎右衛門は、ひたと文面に目を据えつけたまま食い入るように文字を見詰めている。まなじりの裂けた初老の武芸者の眼に青白い光が宿るのを伊兵衛と権内は見た。一瞬ちかりと光ったその光芒は、次の瞬間にはふっと消え、みるみる喜色とその満面を覆い、座り直した巨軀が重心を失ったかのようにぐらりと揺れた。

弾けたような哄笑のためであった。五郎右衛門は手紙を放り出して小児のごとくいつまでも笑い転げた。いったい何が書かれていたのかと、伊兵衛は、目の前に投げ出された文にそれとなく目をやった。

「日頃ノ剣術、手足ノ動力ザル際如何……」

という文面が目に入る。それ自体は、単なる怪我見舞いと思われぬ平易な、どうということのない文章である。それよりも、五郎右衛門の笑い転げる様が異様であった。

ふっと笑いを止めた師にひたと見据えられた伊兵衛は、穏やかながらも、一瞬にして自分の全てを読み取られたような視線に戦慄を感じ、恐怖の眼差しでまじまじと師を見詰めた。

目の前にいる五郎右衛門は、先程まで接していた人物とはまったく違った人間のように思われた。髭に覆われたこけた頬は変わりがないとしても、顔面は赤みを帯びて艶々と輝き、眼の光はあくまで穏やかで、大きな身体にすばらしい精気が漲っていた。

「伊兵衛、和尚にしてやられたわ」

いかにも嬉しそうにそう言って、五郎右衛門は、またしても晴れ晴れと笑っ

た。

伊兵衛は漆黒の豪傑髭を強張らせ、恐れ慄きながら「はっ？」と意味を解しかねる生返事を返しはしたものの、師の五郎右衛門が、虚伯和尚の文をきっかけに、一切の迷いから解き放たれたことに気がついていて。

五郎右衛門は、襖の外に控えているはずの平助に向って、

「木太刀を二本これへ」

と命じた。

(八)

夜の帳が降り、真円を少し欠いた下弦の月が、その白銀の輝きを送ってよこす温泉宿の中庭に、師弟はそれぞれ木太刀を構え、長い陰を引いて向かい合う。

伊兵衛は、切先を少し右に向けた新陰流独特の正眼の位を取り、隙なく身構える。庭に下り立った瞬間から、もはやどのような位を取ろうとも、師の太刀を防ぎようがないことを伊兵衛は悟っていた。

派手な染付けの小袖に、海老茶の括り袴を履いた旅装姿の伊兵衛に対し、くたびれ切ったカスリ模様の綿の小袖、同じ模様の袴を着し、着古した綿入れの袖無し羽織を引っかけた五郎右衛門は、何の構えもなく、だらりと木太刀を引つ提げたまま、自身の筆頭門弟と向かい合う。

木太刀を構えた瞬間から、伊兵衛は、額に汗が浮かび出るのを感じた。道場の稽古では、打ち勝つことはできないまでも、師相手にかんりの働きをすることのできる免許皆伝の腕であるが、いま目の前にいる相手は、初めて目の当たりにする神のごとき一個の巨大な影であった。

それでも伊兵衛は、免許を許された剣家としての自身と誇りを急いで呼び戻し、全気力を剣先に集中させようとした。

その気の動きを見届けるようにして、五郎右衛門は動いた。

といっても、右手にだらりと下げていた木太刀を、そのままスツと頭上にかざし、相手の構えをまったく無視する格好で、伊兵衛に向ってひたひたと歩み寄って来ただけである。その姿に一点の迷いも気負いもなく、相手など存在しないかのように、するすると間境を踏み越える。

伊兵衛は恐怖し、すぐさま木太刀を投げ出して、その場に座り込んで平伏した。下手に動けば殺されると思ったのである。地面にこすり付けんばかりに垂れた額から、新たな脂汗が湧いて滴り落ちた。

「伊兵衛よ、和尚は途方もない土産をくれたの」

以前とは声質まで変わってしまった師五郎右衛門の、軽く、のびやかな声が頭上から降ってきた。

「そ、そのよう御座りまするな」

平伏したまま顔を上げられないままにいる伊兵衛の、両頬を覆うハリネズミのような髯が、ほのかな月明かりの中でひくひくと蠢いた。

長年にわたって血の滲み出るような剣の修業を繰り返し、針ヶ谷道場入門九年目にして新陰流の免許皆伝を得、天賦の才を認められて門弟筆頭の師範代にまでなったその伊兵衛が、まるで剣術を習い始めたばかりの小僧のように、木太刀を投げ出して地べたにうずくまってしまったのである。

伊兵衛は、師がまったく新しい剣術の境地を発明したまさにその場に立ち会っていることを強く自覚するとともに、激しく動揺し、惑乱し、ほとんど度を失っていた。

(九)

翌朝早く、伊香保の宿を出立する四人の主従の姿が認められた。馬に乗っているのは針ヶ谷五郎右衛門その人であり、轡を取るのは平助、付き従う二人の武士は、木村伊兵衛と中村権内である。

前夜、立会いの後に酒となったその場で、五郎右衛門は、虚伯和尚のさりげない見舞いの書面の一行、

「日頃ノ剣術、手足ノ動カザル際如何」

という言葉に触れたとき、電光に打たれたように頭蓋に白い光が走り、その瞬間、虚伯和尚から出されていたすべての公案が一举に解ける思いがした、道中で伴をする伊兵衛にそう語って聞かせた。そのときの大悟の瞬間を、

「人生天理の自然に安座して一切の所作を破り、八面玲瓏物外の真妙を得」たと、晩年の高弟小出切一雲に語っている。

突然の襲撃による落馬によって、左腕の自由を失った五郎右衛門は、剣家としての輝かしい生涯が一瞬の内に無と帰する暗黒を味わった。雪混じりの寒風を厭わぬ座禅三昧は、その喪失に対する全精神の問いかけであり、生命存亡の戦いであつたのである。

しかし、和尚のあの一行によって、自分がこれまで学び修業してきた型に囚われていたことを教えられた。片手が使えなければ、残った片手で剣を扱えばよい。ただそれだけのことである、と和尚は言っているのである。五郎右衛門が得た結論と見事に一致しており、全天を覆う暗雲が瞬時にして晴天となるような、心の隅々まで晴れ渡る玲瓏とした気分を体験することができたのである。

それまで相打ちを極意の頂点として修業・指導してきた五郎右衛門にとって、捨身の片手撃ちは了とするところであつた。(夕雲と名乗るようになって後、彼は、相打ちを超えた境地として、相抜けということを称えはじめる。相抜けというのは、剣を構え合った者同士が、お互いに試合をする必要もないほどに達

した状態を感じ合うことを指す。)

こうしてすべてが一点に繋がってくる。悟りというのは、一個の人間が、長年にわたり一つのことに全身全霊で打ち込んできて、精神的に生きるか死ぬかの危機に追い込まれたとき、やっとその糸口を見出すところから生じるのである。あくまでそれは糸口であって、大悟の瞬間というのは、その人間の危機意識の深さ、極限にまで心身を削る鍛錬の賜物といってよいであろう。

五郎右衛門は、哄笑とともに訪れた大悟の瞬間、流祖上泉伊勢守信綱以来、四代にわたって伝えられてきた新陰流（及び、自身がこれまで身に付けてきた緒流の剣法）が、瓦礫のごとく崩れ去るのを感じた。

まったく新しい天地を手中にした五郎右衛門は、即座に帰国を決意し、翌朝の出立となったのである。

後にする浅間の山は、朝日を受けて輝き、変わらぬ悠久の噴煙を全天に押し上げている。しかし、数ヶ月前に同じ噴煙によって迎えられたその稀代の兵法者は、いまは兵法の心奥を会得した覚者となって浅間の山容に見送られ、馬上の影を小さくしつつある。伊香保の里は後世に誇るべき一つの仕事を成し遂げたかにみえる。

二日後、江戸に帰り着いた五郎右衛門が真っ先に掛け付けたのは、いうまでもなく、駒込竜光寺の住職虚伯和尚であった。

小さな庫裏の前で節くれだった梅の木にいまや盛りと咲き誇る梅の花を、筆で和紙に写し取っていた和尚に事の次第を細かく語って聞かせると、禅師は齒の抜けた口をにつとほころばせ、

「流というべきようもなければ、名もなし、名づけば無住心剣術と云わんか」
そう言つて、一流開悟の自覚を得た五郎右衛門を心から祝した。

ほどなくして五郎右衛門は、神田小網町にある道場に主たる門弟を集めて引退を宣言し、道場の運営は、門弟筆頭の片岡伊兵衛に任せることとした。そうして、自ら初めて夕雲と名乗り、自身は、新陰流から袂を分かち、伊香保温泉で開眼した無構え片手剣法を、虚伯和尚の言葉に従って無住真剣術（流）と名付け、新しい一派を立てることにしたのである。承応二年（一六五四年）針ヶ谷夕雲五十四歳のときのことである。

これ以後、彼は望まれても真剣勝負をすることは決してなかった。

夕雲の開眼によって一流開祖となった無住心剣術は、二代小出切一雲、三代真里谷円四郎と、傑出した人物によって道統を伝え、我国五百年来の剣術史に、心法を主眼とした剣法をもたらすことにおいて突出し、今日、あまたの古武道家、古武術研究者によってその魅りを果たしつつある。

この小説の執筆に当たり、
新人物往来社刊『日本剣豪 読本』（平成五年）集中、「針ヶ谷夕雲」ならびに
「中村権内」（共に筆者は甲野善紀氏）の両項から幾多の示唆を受けたことを感
謝し、ここに特記いたします。（信志）